

夫は駒込病院で悪性リンパ腫と診断されてから、入院、治療を受け、110 日目の昨日で、6 サイクルの治療をすべて終了しました。これから抗がん剤の副作用に耐えながら、効果が出たことを確かめるまで、しばらくの時を忍耐して過ごすことになります。



この間、私は 105 回見舞いました。バスを使った日もありましたが、田端駅から病院までの片道910mを、あたかも「お百度を踏む」かのように往復したのです。その道は駅前に「田端文士村記念館」があり、「タバタ・アベニュー」と命名され、「りゅうのすけくん通り商店街」という河童の絵のバナーが垂れ下がっている一本道でした。アベニューには竹久夢二の名前もあったので、手元にあった竹久夢二の画や、遺作集を眺めました。夢二の愛唱の自作の歌「さだめなく鳥やゆくらむ青山のあをのさびしさかぎりなければ」を見て、悲しさを覚えました。

そのため、この道を私は大正時代の文士の亡霊と共に歩いてみたい気もしました。大正生まれの両親がいながら、「大正ロマン」と言われた時代に対して全く知識がなかったことに驚き、恥じ入りましたが、今更、万事休す。電車の中で、睡魔と闘いながら、「田端文士」の詩人の詩集を読みました。

まず、室生犀星が芥川龍之介の友人だったと知り、犀星の詩集から。犀星もなぜか、「青い」！青き匂い、青草、雪の青き、蒼い犀川、いよいよ青き世界…彼の素朴で素直な詩の世界は、青い悲しみの涙が流れていましたが、自然の営みに注がれる目には、温かい涙も流れ、命の温もりにも触れられる思いがしました。孤独と闘い、彷徨いながらも、自分の生きる場を求めていく、束縛やこだわりのない自由さも感じます。こんなに素直な詩を詠む人が、芥川龍之介と親しかったなんて、不思議でした。龍之介を読んだ後で、犀星が龍之介の友人で良かった！とつくづく嬉しくなりました。

次に、犀星の親友であった萩原朔太郎の詩集を読みました。また、驚きました。それは朔太郎の言葉が研ぎ澄まされていて、鋭く突き刺さってくるからでした。詩とは、疚しくて、隠したいようなことでも、覆いをはぎ取り、本質を、言葉の魔力でさらけ出すことなのか、詩とは心の奥底の捉えられない情念にも美しい形を与えることなのか、等と考えてしまいました。魅力がありましたが、息苦しさも感じました。朔太郎の世界は、犀星の質素な雰囲気とはガラリと異なり、贅沢と放蕩の匂いがしました。この時代に、朔太郎は表現の自由を存分に味わったのだらうと思います。



『芥川龍之介全集』I~IV (筑摩書房) を読み終えることが出来ました。すべて短編だったのが幸いでした。彼の作品は古典の翻訳もの、改訳ものが多く、知らない言葉が多く、索引が無数についていて、読むのに苦労がありました。ストーリーテラーとしての手法は見事です。いわば、サスペンスものを読んでいるような緊張感と結末への期待感がありました。けれども美しい文体と構成に魅力はあっても登場人物への共感のような魅力を感じる事が難しいのです。登場人物の感性、感情、心情など、「袈裟と盛遠」のように、裏の裏まで描き出している、あまりにも悲しい。

「地獄変」「奉教人の死」の主人公も激しく、悲しい。醜く、隠したくともおのずと現れる人間の性へ容赦ない観察の目が注がれています。興味の対象は古今東西。知識欲は貪欲で、味わい尽くすまで。面白い点は、江戸っ子なまりをチラホラ出しながら、明治、大正期の日本人の暮らしぶりを紹介しているところです。けれども遺作となった「ある阿呆の一生」を読んで、辛くなりました。あの時代、彼が置かれ、背負った、身分や家制度の柵に、また知識人、芸術家としての枠に、がんじがらめになっていたのではないかと感じてきました。35 歳で自死するとは、あまりに悲しく、残念です。